

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ東京42書き下ろし

作：庵字（新生ミステリ研究会会長）

刑事狼 シーズン21 第5話 「欺瞞の報酬」

「死因は、腹部をナイフで刺されたことによる失血死だそうだ」

同僚刑事——高梨の言葉を聞くと、嘉山は首を傾げて、

「変……じゃないか？」

「……なにがだ」

「血の量だよ」嘉山は、死体の腹部周辺の、真っ赤に染まったフローリングを指さして、「少なすぎないか？ 失血死するほどの出血だとは思えない」

「……なにが言いたい？」

「本当の殺害現場は、ここじゃない」

「……死体に移動された痕跡のないことは、検視で確認されている」

「だが……」

「寝室の金庫がこじ開けられていた。金目当ての犯行の可能性が高いな。ここは鑑識に任せて、聞き込みに行くぞ、嘉山」

最後にもう一度首を傾げつつも、嘉山は高梨のあとを追った。

聞き込みの成果は芳しくなかった。

「そんなに簡単にはいかないな……一服するか？」

「そうだな。ここは俺が奢るよ」

懐から抜き出した小銭を数えて、高梨が道路を横断しようとしたところに、

「おい」

嘉山が声をかけた。高梨が足を止めて振り向くと、

「自販機なら、ここにあるぞ」

嘉山は、自分のすぐ隣に設置されている自動販売機を指さした。が、

「……いいんだ」

高梨は、十数メートル向こうにある自動販売機まで、道路を横断していった。

休憩中に鑑識からの電話を受けた高梨は、通話を終えると、
「死亡推定時刻が出た。昨夜の夜十一時から零時の一時間だ」

「そんな時間に自宅で殺されたということは、犯人は被害者と親しい人物かもな」

「ああ、女という線もありえる。金持ちで遊び人だったそうだからな」

「夜になったら、近辺の繁華街にも聞き込みに行こう……」言いながら懐をまさぐった嘉山は、「……ん？」

「どうした？」

「煙草を切らしてる。確かに入れておいたはずなんだが……。なあ、一本くれ」

「ないよ」

「ない？ 禁煙でもしてるのか？」

「……まあ、そんなところだ」

「嘘だろ？ 捜査一課きつてのヘビースモーカーのお前が禁煙なんて……」

「きっぱりとやめたんだよ」

「本当か？ 仕方ない、買ってくるから、ちょっと待っていてくれ——」

「そんな暇はない」

高梨は、嘉山の腕を掴むと、強引に覆面パトに乗せた。

夜の繁華街で聞き込みを続けていた途中、嘉山が突然足を止めた。高梨は数歩歩いてからそれに気付き、立ち止まって振り返る。嘉山の視線は、ある店先に張り出された、缶コーヒー販促ポスターに刺さっていた。嘉山に近づくと、高梨は、
「……どうかしたのか？」

「見ろ……」嘉山は、そのポスターの中、笑顔で缶コーヒーを手にする俳優の顔を指さして、「これは……俺だ……！」

「……バカ言え」

そのポスターをちらりを見て、笑みを浮かべる高梨に、嘉山は、

「バカなものか！ こいつは、この男は……どう見たって俺じゃないか！」

「……別人だ。お前は捜査一課の刑事、嘉山俊樹だ」

「じゃあ……こいつは、このポスターに写ったこの男は、誰なんだ？」

「……織田洋だろ、俳優の。知らないのか？ 有名だぜ」

「……知らない」

「確かに、よく見ると、お前に似てるかもな」

笑う高梨の横で、嘉山は店のガラスに映る自分の顔と、ポスターの俳優の顔を何度も見比べて、

「……似ているなんてものじゃない。俺だよ……こいつは……」

「お前、芸能活動もやってたのか？ 公務員の副業は服務規程違反だぜ」

「……そんなこと、やるわけが……しかし……これは……」

「気にしすぎだ。もう行くぞ」

嘉山の肩を叩いて、高梨は強引に聞き込みを再開した。

繁華街での聞き込みで有力な情報が得られた。被害者は、とあるキャバクラで働くひとりの女性に入れ込み、頻繁に足を運ぶようになっていたという。愛車で出勤したばかりの店長の話によると、その女性の父親は、経営する会社が倒産したことでもかなりの借金を背負っているのだという。女性はこの日も出勤していたため、二人は話を訊くことにした。

「ああ、あのお客さんですか。しつこい人で困っていたんですよ」

「自宅へ行ったことなどは？」

「あるわけじゃないですか」

「昨夜の十一時から零時のあいだは、どこにいましたか？」

「ここで働いていました。店長や、ほかの女の子、それにお客さん、証人は何人もいますよ。あ、そういえば、そのお客さんは、昨日は来なかったわね……」

見ようによつては不敵とも捉えられる笑みを浮かべて、女性は堂々と証言した。

「アリバイは完璧だな……」

店を出ると、高梨は忌々しそうに呟き、その横で嘉山は、

「ああ……だが……」

「なんだ？」

「犯行現場が、被害者の自宅じゃなかったとしたら、どうだ？」

「どうということだ？」

「被害者は、どこか別の場所で殺されて、自宅まで運ばれてきたんだよ。例えば、あの店の裏とか。睡眠薬で眠らせておけば、トイレに立つ数分で殺害は可能だ」

「お前、まだそのことを……」

「調べてみよう」

「——おい！」

高梨の手を振り切った嘉山は、店の裏手にある駐車場まで走り、そこに駐めてある一台の車に目を付けて、

「これは……店長の車だな……なんだ？ これは？」嘉山は、車体に付いたエンブレムを見て、「どこのメーカーの車だ？ こんなマークは見たことがないぞ！」

「そりゃ、そうだろう」その後ろから、追いついてきた高梨が、「そんなマークを持ったメーカーなんて、ないんだからな」

「……ない？ どういう意味だ、高梨」

「犯人は店長だ。勤務中に車で現場に行つて殺したんだ。あの女性と店長はできてたんだよ。店長のアリバイは女性が偽証することになってた。あの女性は、被害者のことを『困っていた』と過去形で話した。まだ事件は報道されていないっていうのに。父親が借金背負ってるって話も真つ赤な嘘さ。このあと店長を裏切って金を独り占めするつもりなんだ。まあ、店長のほうでも——」

「——高梨！ お前、どうしてそんなことを……。それに、そんな話が、この車と、どういう関係がある？」

「殺人犯の愛車を実在するメーカーの車にできない。昼間の自販機だつて、『スポンサー』の銘柄を選んだだけさ。それと、あまりに大量の血を『画面』に映すのは今の時代はNGだ。当然、喫煙なんでもつてのほか。『喫煙者』つて俺たちの設定は、いつの間にか消えちゃったのさ。これも時代の流れ。この『刑事狼』は二十年以上続いているからな。『長寿ドラマ』の宿命つてやつさ」

「…………」

「自分が何者か、思い出したか？ 嘉山……いや……」

その瞬間、織田洋の視界に、『今まで見えていなかったもの』が映し出された。大勢のスタッフ、メガホンを持つ監督、そして、自分を捉えているカメラの、冷たいレンズが。

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」お—89、90に、ぜひまたお越しください！

